

資料紹介

叡山文庫所蔵止観院文書『神事能雜記』

池 田 晶

はじめに

ここに紹介する史料は、叡山文庫所蔵止観院文書の『神事能雜記』（以下『雜記』）である。^①同史料は、享保二〇年（一七三五）三月九日、近江国志賀郡上坂本（現滋賀県大津市坂本）に鎮座する日吉社（現日吉大社）で行われた、日吉神事能に関する記録で、準備がはじめられた享保一九年（一七三四）十一月一〇日から神事能興行までが日付順にまとめられている。記主は、比叡山延暦寺の東塔西谷に所属する執行代妙音院仙順である。

叡山文庫は、大正一〇年（一九二一）、伝教大師一千百年遠忌記念事業として延暦寺によつて同寺の里坊が立ち並ぶ坂本に設立され、延暦寺、日吉社など関係寺社に伝来した古文書・古典籍・經典類・絵図等を中心に収蔵している。止観院

文書は、比叡山山麓にある止観院（現滋賀県大津市坂本）に伝来し、現在は叡山文庫が所蔵している。止観院は、別名収納所とも呼ばれ、比叡山を構成する東塔・西塔・横川の三塔のうち東塔に属し、東塔院内の衆議所、または三塔の衆議所でもあった。^②

日吉神事能は、豊臣・徳川政権による日吉社の再興後、時代の変遷とともに変容を遂げたと考えられるが、『雜記』は、近世中期の日吉神事能の有様を最もよく伝える史料である。

一 日吉神事能

日吉神事能は、『申楽談儀』にも記される古い由緒をもつ神事能で、^③毎年正月に日吉社で行われる神事の一つであった。その後、元龜二年（一五七三）、織田信長の比叡山焼き討ちによる日吉社の被災にともなつて途絶したが、豊臣・徳川政

権による山門領五千石の安堵により、神事能も再興された。

この神事能を統括していたのは、三塔の執行代であった。

近世の延暦寺寺務組織を担う三塔の執行代は、比叡山延暦寺で、寺内の寺務を月番で担い、東塔・西塔を執行代、横川を別当代といひ、三執行代と総称された。⁽⁴⁾

近世の日吉神事能は、例年一月下旬より準備がはじまり、正月六日に樹下宮（十禪師）にて、翁をはじめとする能が上演されていた。出演する能役者は、三執行代を中心に選任され、その後、能の番組や配役が決められた。

再興後の神事能の記録の初見は、天和三年（一六八三）である。⁽⁵⁾はじめは途絶以前に神事能を担っていた日吉姓の能役者が演じていたが、その後、京都在住の能役者など多くの能役者によって演能されるようになった。宝暦十三年（一七六四）より京都の観世流片山九郎右衛門が参勤するようになってからは、明治維新後の一時的な途絶を除いては、現在まで片山家が神事能を演じている。⁽⁶⁾

現在、日吉神事能は、「大戸開神事」として、毎年正月元旦早朝より日吉大社の宮司・神職三名が西本宮本殿の御扉を開き、神供を献上した後、京都観世流シテ方片山九郎右衛門とその社中の地謡四名により日吉大社の西本宮拝殿で俗にいう日吉の翁が舞われる。その後、東本宮へ移動し、西本宮と

同様に御扉・献饌・祝詞と続き、東本宮拝殿で高砂の一節である「四海波」が謡われる。現行の日吉神事能は、近世とは異なり、開催日・演能場所・番組等が大きく変更され、別の神事として行われていた「大戸開神事」と習合させる形で演能されている。⁽⁷⁾

二 神事能の近世的変容

『雑記』は、本来、享保二〇年正月六日に行われるはずであった日吉神事能を、同年正月末に延暦寺に來山する毘沙門堂門跡公遵法親王に観能させるため、神事能の期日を延期し、それに伴う延期日時の決定、舞台の設営、見物人の対応などの事項を記録するため作成されたものである。

神事と不可分な関係である期日の変更は、極めて難しい事項であったため、『雑記』の記主である執行代妙音院は前例を調べたようで、止観院文書『日次記』享保一九年一月二一日条に次のように記されている。⁽⁸⁾

一 神事能之事内證云々有之先例相考候所元禄七年三月江相延候、是ハ山科 （毘沙門堂跡） 久遠寿院宮御見物被 遊度由、尤正月者寒氣強候故、三月江相延趣也、尤度々相延候義、皆 久遠寿院宮御見物之故之由覚居候、人多ク有之別而山科御家中者得と覚居候也、

これは、元禄七年（一六九四）、久遠寿院宮（毘沙門堂門跡）が正月の神事能を観能する予定であったが、正月では寒気が厳しいため、三月に延期したとある。また、「尤度々相延候」の一文からこういった延期は度々発生していたものと考えられる。このような前例に則り、享保二〇年も毘沙門堂公遵の来山にあわせて神事能の変更が行われた。

『雑記』には、「神事之一通者先格を以致来候、能も神事之一ツニ候得者筋違候義出来候而者不相済段可申と存」ともあるように、延暦寺は表向、神事と神事能を一体のものとして主張しているが、毘沙門堂公遵の観能を優先させて、神事能を三月に延期した。こうした神事と神事能の分離は、近世における日吉神事能の変容の結果であり、近世中期の神事能興行の特長と考えられる。

このような観能を優先させる対応は、次のような調整も派生させることとなった。

一 西南舞臺屋柵之上方ハツ時過日指込候而、御見物所之能之様子見へ不申由、本住院拙僧呼出し幕張候様こと申二付、幕余慶持参有之哉と中座ニ尋候所式通余慶有之由故張候得共、高ク張候事難成、却而橋懸り之様子見へ不申候者、舞臺之屋柵之上方指込候故竹田縫殿と致相談、一向幕者取申候、重而ハ拜殿之垂木ハ舞臺之

屋柵之上江南西江引廻シ幕張可申事、

これは、神事能を見物する見物人がハツ時（午後二時頃）、舞台南西南方向の屋根上から西日が差し込み、能が見えにくいことから、本住院が妙音院に幕を張るよう申し付けている。そこで、西日の差込防止のために、妙音院は余分に持参していた幕を高く張り巡らした所、舞台の橋懸りが見えなくなつたので、幕を取り外し、拜殿の垂木から舞台の屋根上にかけて南西方向に幕を張つたとある。これは見物人を優先させた対応といえよう。

こうした観能環境の整備にとどまらず、見物場所の設営・便益施設から屋台など、勧進興行とは変わらない設営が必要となつたようで、『雑記』にはこうした事例が詳細に記されている。

おわりに

以上のように、本史料は、近世的に変容した日吉神事能の演能形態や能役者との交渉・能舞台の設営、興行当日の清掃などに至るまでを詳細に記録したものであり、近世中期の日吉神事能を研究する上で欠かせない基本史料である。

なお、近世の日吉神事能の変容については別稿を設けたい。

註

- (1) 本史料は、橋本初子氏が「叡山文庫の日吉猿樂史料」(『藝能史研究』第一一号 藝能史研究会 一九六五) 四五～五一頁で江戸中期の日吉山王神事能に関する記録として紹介しているが、全文翻刻はおこなわれず、能番組や能役者などの検討を目的とした部分的な翻刻となっている。
- (2) 叡山学院学友会編『歴史と伝説の坂本』叡山学院学友会記念図書出版界 一九四〇 二二二頁
- (3) 『日本思想大系二四 世阿弥 禅竹』(岩波書店 一九七四) 三〇二～三〇三頁、表章校註『申楽談儀』(岩波書店 一九六〇) 九七頁
- (4) 『新大津市史 別巻』(大津市役所 一九六一) 三七五～三七六頁
- (5) 叡山文庫所蔵『日次記』天和三年正月六日条(別当代文書 日 二)
- (6) 宮本圭造「日吉社神事能と京都の能役者」(同氏『上方能楽史の研究』和泉書院 二〇〇五) 一四四～一六三頁
- (7) 宮本圭造「日吉大社の大戸開き」(『滋賀県の民俗芸能』滋賀県教育委員会 一九九八) 一〇八～一〇九頁
- (8) 叡山文庫所蔵『日次記』享保一九年一月二日条(止観院文書 日並 三五)

〔凡例〕

一本史料は、叡山文庫所蔵『神事能雑記』(止観院文書 日吉八六)である。

一本文翻刻にあたっては、表記は原則として常用漢字を用いた。但し、変体仮名は現行の字体に改めたが、助詞として用いられ

る「江(え)、者(は)、而(て)、茂(も)、与(と)」についてはそのまま用い、小さく表記した。また異体字(亥・𪛗・𪛘・𪛙)などもそのまま用いている。

一そのほか翻刻の際、翻刻校訂者による注記を掲げておく。

虫損・破損及び判読不能部分は、字数の確認できる部分については、□の数で表示した。

原本の抹消・改変の部分については、判読できる場合は、左側にㄱㄱㄱを付して表記した。

誤字・脱字については、誤り・脱字が明らかである場合は、傍注()で表示した。

一固有名詞や地名・人名は原則として原文表記に従った。

一史料の翻刻にあたり、記事中の読点を新たに付け、翻刻校訂者が行った変更部分は()を付けて表示し、注記を付した。

翻刻史料『神事能雜記』（止観院文書 日吉 八六）

（表紙）

享保廿乙卯年三月九日興行
神事能雜記

妙音院仙順

享保二十年乙卯三月九日神事能致興行候雜記

一 享保十九年霜月廿日覚林坊里坊江見舞候処地被申候ハ

（毘沙門高跡也）

毘門様来年ハ正月末ハ御住山可被遊候、就夫神事能二月江

相延申度候、然共 毘門様ハ御好ミと申二而者不宜、江戸江

之聞ハ茂有之候、前々

（毘沙門高跡也）

久遠寿院様御好ミニ付相延候、例度々有之段山科御家中何

茂存之事ニ候間、一山存寄ニ而相延入御覽可然候、正月十

五日□迄ハ御用御座候間、正月五日・六日ニ此方江御成

ハ決而成り不申候、三月者 御讓位之御沙汰ニ候間、二月

江相延候様ニと被申聞候故成程御尤ニ存候、併二月江相延

候例無之候、三月・四月又ハ九月江相延候例有之候間、衆

中江茂相談之上、三月六日ニ可仕旨申入候處、覚林坊被申

候ハ 御讓位三月と申御沙汰ニ候処、能興行之義如何之由

被申候故、拙僧挨拶ニ山王之能者神事ニ候間、却而御祈禱

ニ罷成候故、不苦義と申入候処、又覚林坊被申候者 御讓

位ニ付、御修法被 仰出候事決定と存候、是ハ日限差定候

事故、決而指間可申由被申候故、拙僧挨拶ニ縱能興行之日

御修法開闢仕候とも指間不申候、開闢ハ必初夜にいたし来

候、三月者長日之節故能過候而登山開闢可罷成候、其餘之

日者谷勤之出仕、西河者院内ニツ割出勤と相見へ候間、早

朝ニ修行茂可罷成又能過登山執行茂可罷成と申入候処、左

候ハ、先三月六日ニ御延可被成間被申候故弥三月六日ニ

可仕と令挨拶候事、右二月江相延不申候訳者、先例茂無之、

殊ニ自分江戸御年頭番之年者留守ニ候故色々指間有之候、

縦ヒ參府番ニ而無之此方ニ居候年ニ而茂二月興行之事決メ仕

間敷候、二月ニ相延候例有之時者、又參府番之年ニ而茂二月

興行不仕候而者不叶事可有之候、此事祭礼等之端ニ成り

様々指間候事故、存寄記置候也、

附閏月ニ者神事不仕由古老申伝也、是亦可相心得候、正月閏月有之休又指間候事云々

一 廿一日能太夫山川文次来神事能弥拙者江被仰付被下候哉之

窺也、弥其方相勤候様ニ申付候処、左候ハ、乍自由今日

番組指上申度由願候ニ付、差出し候様ニ申付候處、追付番

組ニ通指出候而文次申候者、例年番組一通指上候得共、来

年者 毘門様御覽可被 遊御様子山科御家中竹田縫殿殿^ら御内意有之候、若三月江相延候得者、能茂違申候三月難致能茂御座候故一通者三月江相延候休之番組ニ候由云々申、依之委細令承知候、先ニ通共請取置候、追而申渡ス子細□□之と申聞候事、扱文次申候者狂言六番と申事、能之作法ニ無之候間、五番ニ仕度由願候故、有来通六番仕様ニと申渡候事、

一 廿一日收納日ニ付、四谷学頭代江神事能三月江相延可申段内證咄候事、

一 廿三日西河役人・惠雲院・溪廣院寄合候席ニ神事能三月江相延 毘門様江入御覽可申候 久遠寿院様御好ミニ付三月江相延候例有之候、今度者一山^ら願入御覽可然段申入候処何連茂尤之由被申候、兎角御料簡次第と被申聞候事、

一 同日玉照院在麓ニ付呼寄、神事能三月江相延候事咄候也、
一 廿五日滋賀院江上ル、山科坊官前大路大武江面談申入候ハ、毘門様来年ハ正月末^ら御住山之思召之由承申候、就夫神事一通者不殘入御覽度衆中存寄候、依之山王神事能三月江相延入御覽度奉願候御覽被 遊可被下候哉、尊慮奉窺候、尤三月ニ相延候例御座候故奉願段申入候処早速被窺、衆中存寄之義故御覽可被 遊との御事ニ御座候由也、扱大式一分ニ而被申聞候者、先例茂無之候而ハ相延候義御遠慮ニ 思召

候得共、三月江相延候義拙僧共^者茂覺 久遠寿院様之御供仕候義度々之事□御座候、殊ニ衆中御存寄之義故御覽可被遊候との事也、扱番組三月分之迄通大式江相渡御好茂御座候ハ、可申付候、先一通入御覽候由申達候処、早速被窺別ニ御好茂無之由也、

一 同日御留守居・西河頼母子之義ニ付、寄合之席ニ神事能三月江相延入御覽度願相濟候段咄候事、

一 廿六日今日收納日ニ付、四谷学頭代江神事能三月江相延候窺茂相濟候趣咄候事、

一 廿七日玉照院呼寄、神事能窺相濟三月江延候事咄候也、
一 廿八日頼母子之義ニ付、橋村徳運・山田喜八参上候故神事能三月江相延候段申渡ス、尤中間江茂相通町々江茂知せ候様ニ申付候事、

一 廿九日社家宮内来宮司正林来中座長門来各屯人宛召寄せ神事能三月江相延候段申渡ス、^仕

一 十二月三日能太夫山川文治来、神事能三月江相延候義申渡ス、扱例年之通大晦日ニ参元朝之儀式可相勤候、只能計三月仕、其外之儀式ハ例年之通可相心得旨申渡ス、附狂言番組書付十二・三日□分までニ持参可仕候、能・狂言師人名書付者三月五日ニ持参仕様ニと申付候也、是者 毘門様狂言之番組茂御覽被成度由覺林坊被申聞候故也、

十二日能太夫山川文次方^ら書狀來、鈴木相模持參、尤相模方江茂書狀來、文次書狀之文言如左、

一書奉啓上候嚴重御座候得共、益御勇健可被遊御座候日出席御儀奉存候、先日伺公之砌被為、仰付候、來春御能狂言組之義、野生差心得^ニ而組上候後、又々御好等^茂御座候得者彼是間違可申と奉存、此間當所烏丸山科御里坊迄狂言御好も可有御座候哉と内窺申上候処、三月之義ニ候得者來春二月迄ニ狂言組ニ通仕候而、又々内證^ニ而差上候へ其上御好之事も有之候ハ、可被、仰付候、此方内窺相濟候上山門江表向窺番組狂言も書入指出候得者、一挙ニ埒明可申間左様ニ仕候へ山門^ら御呵^茂候ハ、從是能様ニ挨拶可仕旨被仰候間、依之此度ハ狂言組指上不申候、然者御能^与ハ先達而指上候ニ違不申候間、是又來春狂言入候時一集ニ相認被仰付候通ニ兩通指出し可申候、右御斷為可申上如此御座候、右之趣竹田縫殿様江御里坊^ニ而通屈仕候、尤狂言師^茂只今^らハ難相克置候故春ニ被成被下候得者私も勝手宜御常日間違茂出來不仕候間、旁以右之通ニ御了簡被成置被下度奉願候、尚大晦日參上之刻百般可申上候、恐惶謹言、

狛月十一日

山川文治

妙音院様
御取次御披露

右之通申越候故、驚入候彼者方^ら 毘門様江御内意窺候筋無之、竹田縫殿不屈之挨拶ニ候、自此方窺候筋ニ候、依之幸明後日山科江院内惣代并自分之寒氣御機嫌窺ニ參上候間、縫殿江致面談、神事之一通者先格を以致來候、能も神事之一ツニ候得者、筋違候義出來候而者、不相濟段可申と存、且又能太夫之分齋^ニ而此方江直ニ書狀遣候事甚推參成事故返事ハ不遣候、扱相模呼寄、右之趣申聞せ彼者方^ら 一分之心得^ニ而右之趣を申遣候様ニと申渡候也、右之書面之通之不届者共故直ニ召寄せ、來年神事能不仕様ニ申付外江可申付哉と存候得共、自分參府番ニ候故、先此度者其分ニいたし候而、神事能為相勤可然と存候事、

一同月十四日 毘門様江寒氣御機嫌窺院内惣代參上之節、竹田縫殿ニ面談、山川文次書面之趣申入筋違候義不得意之承候ハ、御門主様之御威光を倍権柄成ル事と可存候、依之衆中江者一向不申入候、神事之一通者格式別而古法を追候、兎角彼者如何様ニ願候とも御取合被成間敷候窺候義ハ、拙者仕義と云々申入候処御尤ニ奉存候、文次存違之挨拶云々被申聞、扱而翌文治手紙見申度由故見せ候也、未此方江戻シ不申候、強而入用^ニ茂無之故其通ニいたし候事、

一同月廿日夜五ツ半□文次来、参上之届ヶ并歳暮之祝儀扱又去頃無調法之儀仕千萬迷惑仕候、狂言番組も二通持参仕候由、家来源治ニ託書頼何とそ能弥拙者相動候様ニ御執成可被下候由云々申候由也、自分ハ最早休候故対面不申候処、今日早参上仕筈ニ御座候処、抔病氣ニ付速ク罷成候断申罷歸ル、

一享保二十年乙卯元日文治来、年頭之御禮也、対面候処筋違候義仕千萬迷惑仕由云々申候故呵候而、先能者先達而申付候通三月仕様ニと申渡候、文次申候者昨日抔病氣ニ而夜ニ入御当地江罷越候故、昨晚速ク参上仕候由断尤西河御役人江者昨晚者参上不仕候、今日者参上可仕由也、

一正月四日 毘門様江御年頭ニ上り候節、山川文次持参仕候狂言之番組指上ヶ御好茂無御座候哉と窺候處、近藤外記罷出別ニ御好茂無御座候、興行之□節者寛林坊と御入魂候様ニと被 仰候由也奉畏由御請申上、夫々寛林坊江参候所被申聞候者 御讓位之御事三月上旬と相聞候間、神事能二月興行可然と被申候故、二月ニ者難仕候、先例茂無之指問之義有之候間、決而難仕候、御讓位三月上旬ニ而御座候ハ、三月廿八日又者四月六日ニ可仕候、閏月ハ神事惣而不仕事と承候趣云々申入候処、左候ハ、先三月廿八日と御定、若御指合出来候ハ、四月六日ニ可被成候、猶九日参上可

得御意候、其□分ニ者御様子日限茂相知可申由也、

一同月七日滋賀院江三執行代寄合候席ニ神事能三月六日ニ可致旨、先達而申入候得共三月上旬者 御讓位之御沙汰ニ付、

三月廿八日又者四月六日御指合無御座候時分ニ興行可仕旨 毘門様江申上候旨咄候事、

一同月九日寛林坊入来 御讓位弥三月上旬之御沙汰之由被申聞候故、左候ハ、弥三月廿八日又者四月六日ニ可仕と令挨拶候事、

一同月十日社司・宮仕・中座・上濱年寄各々人宛召寄、神事能三月六日ニ興行可申旨先達而申渡候得共、其節者指合有之候間、三月廿八日又者四月六日ニ興行可致候間、左様相心得候様ニと申渡候事、且又矢嶋大膳江申付、能太夫方江右之趣通達為申候事、

一三月朔日早天昨日江戸婦寺候也 寛林坊江面談候処 御讓位三月下旬と申事ニ候、就夫神事能当月十日前ニ仕度候間致料簡具候様ニとの事故成程相心得申候、六日ニ者間無之候間、決メ成申間敷候、先ツ九日と相定可申候、此方之支度者出来可申候得共、能太夫之方難計候、先達而当月廿八日と申遣候間、事急ニ成人人数揃可申候哉千萬無覺束候、能太夫之方承、彼方人数揃候ハ、弥九日ニ可仕旨申入候也、

一同日大膳病氣ニ付鈴木相模呼寄、神事能来九日ニ興行候様

二可致候、就夫能太夫方人数相揃可申哉、明早天京江飛脚遣、日者九日ニ指定弥興行可罷成哉留守ニ候ハ、弟子共開封若文治他国江參候ハ、弟子共寄合相勤候様ニと申遣、尤返事承切帰候様ニ申渡可遣旨申付候事、

一同日御留守居・三執行代寄合覺書披露之席ニ、神事能九日ニ可仕旨咄候事、

一同日長門呼寄、神事能来九日ニ可致候間、明日仲間皆參上候様ニと申付候事、

一二日相模来、山川文次返事持參、弥九日ニ可相勤旨人数相揃、決定八日ニ坂本江參上可仕旨申来候由相届、

一同日中座四人共来、神事能来ル九日ニ致興行候、尤毘門様御覽被遊候間、万端当准后様先年御覽之□之通ニ相心得拜殿圍候事并赤飯上候事念入可申段云々申付候事、

一同日寛林坊江參、能太夫方も埒明申候間、弥九日ニ神事能可仕由申入候事、尤宮様も□□ハ不及申上候宜御申上可被下候と申入候事、

一三日西河衆會之席ニ神事能来九日ニ致治定候旨申入、且又能所弟子共ニ行儀相慎ミ、下々雑談無礼無之様ニ院々衆中江御達候様ニ申入、附三執行代侍之外縁江上候事上下着候者ニ而茂題者中之侍ニ而茂無用ニ宮拜殿江可遣候、南方縁迄宮様之方江入候故上申間敷段茂申入候事、

一同日社家・宮仕・上濱年寄老人宛呼寄、神事能来九日ニ治定候段申渡ス、且又火元念入候様ニ町々江茂可申付旨申渡ス、

一四日四谷字頭代・政所代江年寄回章相廻ス、神事能来九日ニ致治定候、衆中江御達可被成候、右ニ付得御意候義有之候間、明日講後谷々々老人宛御寄可有之旨申渡ス、

一五日講後五谷ハ老人宛入来候故、神事能之節、能所弟子共ニ行儀相慎、下々雑談無礼無之様ニ可被申付旨、且又南之方一間通仕切縁迄茂宮様之方江取候間、北之方之縁上下着之侍等置候事難成候、二宮之拜殿ニ落縁敷置候様ニ可申付候間、此処江參候様ニとの事申入候也、

一七日能太夫方ハ書状来、先達而差上候狂言之番組一・二番違候由断申越、常照房方ハ返事遣一・二番違候分不苦と院主被申候旨申遣、

一同日相模・越後來九日御門主様御出門之節、御案内之公人兩人可申付哉之窺也申付候様ニ申渡、且又上年寄兩人者正覺院里坊江入口之角江可罷遣候哉、准后様之時左様ニ仕候由故、弥其通ニ可仕旨申渡ス、且又二宮拜殿上下着之者前通ニ指置、後江通ニ人品不見苦者指置候様石階二者一向人置不申様ニ可仕候、依之番人兩人指置候様ニと申付、扱又御通り筋道掃除申付候様ニ申渡候事、

一下坂本年寄来候故、仲間之内兩人 毘門様御出門之節、御

先江立御案内申様、御帰茂左様ニ仕様ニと申付候事、

一同日宮仕老^{柳泉}人 呼寄、社頭掃除之事仲間江可申通候、且

又御成道筋社頭掛之分掃除申付候様ニ是亦仲間江可相達旨

申渡ス、扱又客人之疊八疊^ニ而茂拾疊^ニ而茂其方^ニ客人宮仕江

申借用候而中座共^ニ取ニ遣候ハ、相渡候様ニ可仕旨申渡ス、

右疊之事、例年十禪師・二宮兩社之疊相用済来候処、當年

者 毘門様御覽ニ付疊不足ニ候間、近所之疊借用仕度由中

座申ニ付如此、但シ政所代江此方^ニ申入候ニ茂不及事故柳

泉ニ申付候也、

一八日能太夫江遣候、太刀・折紙中座江渡ス、太刀者收納所

ニ有之折紙計認渡ス、

	太刀 一腰	
--	-------	--

中□ニ枚重也、

常之目錄之通也、

行文字ニ出来候

草ニ而□被存當年ハ

草ニ書候也、以上書なとハ叮嚀過候故止

メ候也、

太刀 一腰 此通ニ書候也、

一能太夫江向幕^{張三}火鉢沓貸候様ニ中座江申付候事、但シ能太

夫方^ニ借用仕度由相模方迄願候由彼者申ニ付如此、尤例年

如斯、

一同日出羽參候故、先年 准后様^ハ一山江被下候鰻頭之折三

百人ニ候哉と相尋候處、數ハ覺不申候得共、五百人^ニ而可

有御座候、折ノ大サ三尺四方計御座候、四方割りかけニ

たし扱候処赤絹切^ニ而包候、殊之外結構成折^ニ而御座候、槌

二五百人^ニ而可有御座候旨也、

右折之様子相考候処槌二五百人と被存候、三百入之折ハ

幅沓尺五六寸長□三尺計ニ候故也、

一同日能太夫文治来、能・狂言番組ニ通持參、内一通者

毘門様江指上候所存^ニ而持參仕候、拙者指上可申哉と窺候

故、此方^ニ指上候筋ニ候間、二通共ニ此方ニ指置候様ニ申

渡候事、

一同日相模江申渡候者例年之通番組沓通十禪師江今日指上候

様ニ能太夫江可申付旨申渡、

右十禪師宮仕玄順申候ハ、例年十禪師江沓通指上候節、

神前江備置三番三相濟、私共頂戴仕候、能太夫正月參候

□分例年之通沓通指上候様ニと申候処、番組末相定候由

申ニ付其通ニいたし置候、例格ニ御座候間、八日二一通

指上候様ニ被仰渡可被下由申^トニ付、右之通ニ申渡候事、

一八日中座方^ニ拜殿圍候間、御覽被下候様ニと申越候故參見

不宜処少々直候也、

一同日正覺院江參、明日指貫御着用可被成候、宮樣ニ茂被召候筈ニ御座候、出世役人中江者其元方御通達可被成旨申入候処成程相心得候、根本者素絹五條ニ而候由也、

一同日延命院山科御家中同道、十禪師拜殿江被參候処、御家中之内、延命院江御中間之居所定置度由被申候故、成程御尤ニ存候、其趣妙音院江可申入と被致挨拶、追付延命院方右之案内申来候故、繩竹杯を延命院同道ニ而十禪師江參、南方ニ沓間ニ三間場を取候也、東谷十三坊之棧敷之側也、扱而□□ニ御中間と書付いたし立置候也、九日朝筵之上ニ落縁三枚敷置候也、

一八日竹田縫殿江面談之節、彼仁申候者十禪師御拜殿御圍見申候処、南方者下座ニ見へ候由故前々方南方ニ而候、上座・下座之訳茂無之御見物第一ニいたし来候、北方者橋掛之処見へ兼申候、殊ニ北方者地形高御座候故、御前近クニ雜人高所居候事も如何故、南方取来候義と存候段申入候処御尤至極ニ奉存候由也、

一同日覺林坊江、宮樣御興者端籠之際石橋迄、礼拝講之時探題下興之所也御乗被遊、夫方御步行被遊候様ニと申入候處成程相心得候也、

一九日晴天正六ツ時、素絹輪袈裟侍老人草履取一人召連十禪師拜殿江參様子見繕追付、東谷学頭代習禪院并西河執行代

但西河執行代来候者相待始候事ニ而着無之候、東谷学頭代見へ候而彼谷役人揃候へハ不構西河始候事也

来ル能太夫揃候有無中座ニ尋させ候処相揃候由也、六ツ半時上ノ年寄ニ申付、先拂之公人兩人滋賀院江遣ス、下坂本年寄兩人御先江立御案内申様ニ申付滋賀院江遣、最早御出門被遊候様ニと覺林坊迄之拙僧口上下坂本年寄ニ申付遣一六ツ半少過、御成御衣鉢緋ノ素絹輪袈裟指貫惣紫ニ而者無之雲模様之様ニ相見へ候也、之事覺林坊権僧正衣鉢青□□字素絹指貫輪袈裟也、護法院衣鉢白素絹紫之指貫輪袈裟也、

一正覺院前大僧正戒善院茂指貫着用被致候也、

一御成前ニ覺林坊方當、准后様御見物之時指貫被手紙ニ而尋来下々手紙持參故覺林坊江円藏院遣ス、成程准后様茂御指貫被召候と申遣、

一御成之時端籠之外ニ而御下乗、此義准后様ニ茂左様ニ候哉、尋有之候故左様ニ候、樓門之跡故也、大宮茂樓門之外ニ而御下乗之由申候也、

一執行代・執行代・別当代・東谷学頭代習禪院參向縁ニ者坊官衆被居候故内ニ而參向、南之方上座ニ取參向致候也、

一御見所江之御案内執行代妙音院計仕候、

一追付一山献上饅頭三百入折下札一山惣中といたし手札ニ者一山惣代執行代妙音院執行代溪廣院別当代惠雲院と書付、竹田縫殿江相渡披露者一山惣代三執行代と被成候而茂不苦段申入所一山惣代三執行代と被致披露候事、

一 山惣代御目見之□御見物所南之方江執行代・執行代・別當代と次第第二一同ニ罷出候事、此時披露有之、

一次ニ東谷字頭代罷出是も手札此方ヲ認參ル、東谷字頭代習禪院と書付竹田縫殿江相渡ス、尤献上物無之手札之通之披露也、

一 南谷・西谷献上物有之、両谷衆中ハ不殘御目見三・四度ニ相濟、中入之時分御目見いたし候人茂有之候、妙音院・円藏院・玉泉院ハ中入之休分御目見いたし候也、

一 妙音院谷勝手之邊ニ而名酒兩種差上候事、

一 能三番三共ニ五番相濟^{祝言共ニ}中入但シ能相濟、追付正覚院里坊江 御成狂言者待ヲ置御成已後窺候而始候也、□彼里坊ニ而御中食被 召上候也、食上り物ハ衆中饗應之通也、

提重ニ通りニ入次□之分も遣ス、

一 提重ニ通り西谷ヲ致借用置、前日中座江相渡候事、

一 昼食赤飯之事、御家中ハ勿論御興之者又者下々不殘昼食申付候事、

一 御先拂公人兩人正覚院江御成之時茂先拂仕様ニ申付候事、

一 山印之有之羽織着し候番人式人はハ二ノ宮拜殿江人上ケ、右四人江中食為給候様ニ中座江被仰付被下候様ニと越後願候ニ付、則中座江其通申付候事、尤年寄共ニハ例年赤飯給させ候由也、

一 還御之節先拂之公人式人下坂本年寄式人 御成之時之通御先江立候事、^{但衆中退出之後還御也、兼而}其趣御家中江示合置候也、

一 下坂本年寄何茂麻上下着用、

一 御先江立候節者ももだち取候事、

一 先拂公人ハ野袴羽織杖つき候事、

一 御道筋小弁^{便たご}置候事無用ニ申付候事、賣物ハ不苦、煮賣茶屋茂置不申事、

一 御昼食ニ正覚院江御成還御共ニ妙音院計參向送ニ罷出候事、

一 御小用所御大弁^便所ハ正覚院里坊ニ相定、社頭近辺故別ニ不做事、

一 准后様之時茂別ニ不作、正覚院江両度迄御成之事、此度者御昼食之外別ニ御成者無之、

一 饅頭三百入〇一山江被下先帳ニ坊官中迄御禮申上候由故、此度茂西河役人江其趣申入、三執行代坊官中迄御礼申上候

極官衆中者不殘御前江出御礼被申上候趣、先帳ニ相見へ候間、^{自分人ニ而申、尤此事西河へ者咄も不仕也、}正覚院江其通申入候処則正覚院前大僧正御前江出御禮被申上候、覚林坊権僧正ハ御勝手故不能其義事、其外僧正無之被下候時節者能前一山献上并南西両谷献上御目見相濟候以後早速被下之、

一 御昼食之後坊官中迄三執行代窺御機嫌候事、

一 中座ニ申付拜殿之饅頭重箱ニ入二ツ宛中食之節不殘衆中江

引候事餘り候故上・下年寄江茂遣、中座共茂頂戴候様ニ申付候事、

一 西南舞臺屋柵之上ハ八ツ時過日指込候而、御見物所^ヲ能之様子見ヘ不申由、本住院拙僧呼出し幕張候様ニと申二付、幕余慶持参有之哉と中座ニ尋候所式通余慶有之由故張候得共、高ク張候事難成、却而橋懸り之様子見ヘ不申候者、舞臺之屋柵之上^ヲ指込候故竹田縫殿と致相談、一向幕者取申候、重而ハ拜殿之垂木^ヲ舞臺之屋柵之上江南西北引廻シ幕張可申事、

一 能相濟、役人地謡まで樂屋江入候迄ハ三執行代・東谷学頭代在座可仕事、上・下年寄・東谷公人兩人同前之事、

一 能相濟候而年寄・中座不残拜殿ニ而祝儀申候事、

能一番過候而

一 當年者天氣克、諸方^ヲ見物人多来候故○覺林坊迄断申入二宮拜殿并石階江雜人上候事、

一 御成前能太夫方^ハ中座共迄例年太刀折紙舞臺を出候而頂戴いたし来候得共、舞臺離レ候而頂戴仕事能之作法ニ無之候、例年之通二候ハ、頂戴之間敷候由申二付中座共○得心不仕候、如何可仕哉と出羽・丹後窺候故様子相尋候処○石段二段下^{例年}り此処ニ立相渡シ候、能太夫ハ舞臺を離、石段之下江参り頂戴仕由申二付、兎角當年ハ格別之事故、臨時之料簡ニ而

相濟候様ニと申渡、依之石段下り切り候而相渡候事、

一 能太夫文治江金三百疋為褒美可遣之旨西河役人江致相談候処、可然候如何様とも御料簡と被申候也、此外者一向不及相談自分忝人料簡也、

一 三執行代 還御以後滋賀院江上ル手札執行代妙音院執行代溪廣院別當代惠雲院此方^ヲ持参、今日者御機嫌克御照覽御祝儀窺御機嫌之由申置罷帰候、

一 山川文次来能料拾石代銀并太刀代本地分勝手ニ而書付を以相渡ス、追付召出シ為褒美目錄遣ス由申渡ス、硯ふたニ入取次但金三百疋也、二而渡之

一 下年寄兩人首尾能御送申上候由断来并祝儀申置候事、

一 上・下年寄并中座祝儀ニ来、

一 九日快晴諸役首尾能珍重、

一 神事能相延候、且又別段ニ有之候例當年十禪師宮仕玄順ニ當年相尋候処、左之通申候也、

一 五十三年前亥年九月十六日ニ御能御座候、是ハ慥ニ覺居申候此時者坂本二日吉五郎右衛門与申太夫居申候所、此者江戸^ヲ御召ニ而下向仕、扱又江戸ニ喜多七太夫と申能太夫御座候処、此七太夫願御座候ニ付、何とぞ罷上リ日吉御能相勤度由 公方様江願上候処願之通御免ニ付、五郎右衛門与致同道罷上リ、九月十六日兩人相勤申候、尤例年之通、

春之御能者相濟、別段ニ九月十六日ニ有之様ニ覚候由也、
 一 久遠寿院様山科ニ御入被 遊候、□者正月之御能三月或ハ
 四月ニ相延候事度々之事ニ御座候、四月江相延候節四日・

五日兩日有之候義も御座候、四日者例年之通り之御能、五
 日者御馳走ニ別ニ御座候由、

一 竹門様（竹内跡）天正院様毘門様久遠寿院様御兩方御見物之事（茂御座候、

其時者南壺間通中壺間通屏風ニ而仕切御兩方別々ニ御見物
 所御構被成候、北壺間通ニ御老分御役人様計御座候、若衆

中様者二宮拝殿江御越被成候、其後 御兩方御成之時者二

宮拜殿ハ勝手不宜候ニ付、北之方江張出シ出来申候、獅子（妙法

吼院様ニ（院門跡カ）茂御見物被 遊候、右御見物之時ハ三月中旬或三

月廿七八日頃ニ而御座候由申候、

一 惣持坊様御役之内、私共仲間ニ願出而床机三脚御院内ニ出
 来十禪師ニ御座候、尤能之節入用ニ御座候と申上候得共、

只今ニ而者入不申候、万一 宮様方夜宮杯御見物之節御用

ニ御座候ハ、上可申由也、 右玄順申趣也、

一 神事能之事、根本者元朝ニ七日迄毎日常有之候、元朝者大宮

二日二宮三日聖真子四日八王子五日客人六日十禪師七日三宮每

歳七日宛之能有之候所、後二十禪師之能計有之、依之十禪

師能ニ一山加候也、夫故東谷ニ役人も色々出申候 御門主

方御覽之時者東谷学頭代者□参向等ニ出候也、先帳脱落候

〔付記〕

故令吟味候所出デ来リ□□紛無之ニ付、酉年も出シ申候、
 尤還御已後滋賀院御玄関へも上リ被申候事也、
 史料の閲覧・複写・翻刻に関して、叡山文庫長山田能裕様、
 文庫職員村上良章様、曾我理恵様のご高配を得ました。記し
 て謝意を表します。